

芥川龍之介全集

第四卷

芥川龍之介全集

第四卷

芥川龍之介全集 第四卷

第四回配本(全十二卷)

一九七七年十一月二十二日 發行 ©

定價 三二〇〇圓

著 者 芥 川 龍 之 介

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田區一ツ橋二五五
發 行 所 株式會社 岩 波 書 店

電話 〇三・二五・四二二
振替 東京六・六四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

素盞鳴尊	三
老いたる素戔鳴尊	八〇
或敵打の話	一〇三
女	一二八
親し過ぎて書けない久米正雄の印象	一二二
中央文學の問に答ふ	一二五
近藤浩一路氏	一二六
短歌雜感	一二八
南京の基督	一三三
杜子春	一五〇

槍ヶ嶽紀行	一六七
大正九年度文壇上半期決算	一七五
私の好きな自然	一七六
捨 兒	一七七
塵 勞	一八五
秀吉と神と	一八七
彼の長所十八	一八九
西洋畫のやうな日本畫	一九一
愛讀書の印象	一九三
影	一九五
雜 筆	二一六
「槐多の歌へる」推賞文	二三六
お律と子等と	二三七
僕の好きな女	二九〇

九年十月市村座評	二九四
漢文漢詩の面白味	二九七
私の好きな作家	三〇二
戀愛及結婚に就いて若き人々へ	三〇三
九年十一月明治座評	三〇四
大正九年の文藝界	三〇七
大して怠けもせず	三一六
岩野泡鳴氏	三一七
秋山圖	三一九
山 鳴	三三四
妙な話	三四九
アグニの神	三五七
奇怪な再會	三七三
合理的、同時に多量の人間味	四一四

近頃の幽霊

四一七

十年一月帝國劇場評

四二二

點心

四二五

同 別稿

四三八

佛蘭西文學と僕

四四〇

懸賞小品「春」と

「犬に噛まれる」を選びて

四四四

十年二月歌舞伎座評

四四六

小杉未醒氏

四四九

三味線も好い

四五一

往生繪卷

四五二

奇遇

四五九

私の好きな私の作

四七二

「桂月全集」第八卷の序

四七三

小說
隨筆
四

素盞鳴尊

一

高天原の國も春になつた。

今は四方の山々を見渡しても、雪の残つてゐる峰は一つもなかつた。牛馬の遊んでゐる草原は一面に仄かな緑をなすつて、その裾を流れて行く天の安河の水の光も、何時か何となく人懐しい暖みを湛へてゐるやうであつた。ましてその河下にある部落には、もう燕も歸つて來れば、女たちが瓶を頭に載せて、水を汲みに行く噴き井の椿も、とうに點々と白い花を濡れ石の上に落してゐた。――

さう云ふ長閑な春の日の午後、天の安河の河原には大勢の若者が集まつて、餘念もなく力競べに耽つてゐた。

始、彼等は手ん手に弓矢を執つて、頭上の大空へ矢を飛ばせた。彼等の弓の林の中からは、勇ましい弦の鳴る音が風のやうに起つたり止んだりした。さうしてその音の起る度に、矢は無数の蝗の如く、

日の光に羽根を光らせながら、折から空に懸つてゐる霞の中へ飛んで行つた。が、その中でも白い隼の羽根の矢ばかりは、必外の矢よりも高く——殆ど影も見えなくなる程高く揚つた。それは黒と白と市松模様の倭衣を着た、容貌の醜い一人の若者が、太い白檀木の弓を握つて、時々切つて放す利矢であつた。

その白羽の矢が舞ひ上る度に、外の若者たちは空を仰いで、口々に彼の技倆を褒めそやした。が、その矢が何時も彼等のより高く揚る事を知ると、彼等は次第に彼の征矢に冷淡な態度を装ひ出した。のみならず彼等の中の何者かゞ、彼には到底及ばなくとも、可成高い所まで矢を飛ばすと、反つてその方へ賛辭を與へたりした。

容貌の醜い若者は、それでも快活に矢を飛ばせ續けた。すると外の若者たちは、誰からともなく弓を引かなくなつた。だから今まで紛々と亂れ飛んでゐた矢の雨も、見る見る数が少くなつて來た。さうしてとうとうしまひには、彼の射る白羽の矢ばかりが、まるで晝見える流星のやうに、たつた一筋空へ上るやうになつた。

その内に彼も弓を止めて、得意らしい色を浮べながら、仲間の若者たちの方を振り返つた。が、彼の近所にはその満足を共にすべく、一人の若者も見當らなかつた。彼等はもうその時には、みんな河原の水際により集まつて、美しい天の安河の流れを飛び越えるのに熱中してゐた。

彼等は互に競ひ合つて、同じ河の流れにしても、幅の廣い所を飛び越えようとした。時によると不運

な若者は、焼太刀のやうに日を照り反した河の中へ轉げ落ちて、眩ゆい水煙を揚げる事もあつた。が、大抵は向うの汀へ、丁度谷を渡る鹿のやうに、ひらりひらりと飛び移つて行つた。さうして今まで立つてゐたこちらの汀を振返つては聲々に笑つたり話したりしてゐた。

容貌の醜い若者はこの新しい遊戯を見ると、すぐに弓矢を砂の上に捨て、身輕く河の流れを躍り越えた。其處は彼等が飛んだ中でも、最も幅の廣い所であつた。けれども外の若者たちは更に彼には頓着しなかつた。彼等には彼の後で飛んだ——彼よりも幅の狭い所を彼よりも樂に飛び越えた、背の高い美貌の若者の方が、遙に人氣があるらしかつた。その若者は彼と同じ市松の倭衣を着てゐたが、頸に懸けた勾玉や腕に嵌めた釧などは、誰よりも精巧な物であつた。彼は腕を組んだ儘、ちよいと羨しさうな眼を擧げて、その若者を眺めたが、やがて彼等の群を離れて、たつた一人陽炎の中を河下の方へ歩き出した。

二

河下の方へ歩き出した彼は、やがて誰一人飛んだ事のない、三丈程も幅のある流れの汀へ足を止めた。其處は一旦湍つた水が今までの勢を失ひながら、兩岸の石と砂との間に青々と澱んでゐる所であつた。彼は暫くその水面を目測してゐるらしかつたが、急に二三歩汀を去ると、まるで石投げを離れた石のやうに、勢よく其處を飛び越えやうとした。が、今度はとうとう飛び損じて、凄じい水煙を立てながら、

まつさかさまに深みへ落ちこんでしまつた。

彼の河へ落ちた所は、外の若者たちがゐる所と大して離れてゐなかつた。だから彼の失敗はすぐに彼等の目にもはいつた。彼等の或者はこれを見ると、「ざまを見る」と云ふやうに腹を抱へて笑ひ出した。と同時に又或者は、やはり囃し立てながらも、以前よりは遙に同情のある聲援の言葉を與へたりした。さう云ふ好意のある連中の中には、あの精巧な勾玉や釧の美しさを誇つてゐる若者なども交つてゐた。彼等は彼の失敗の爲に、世間一般の弱者の如く、始めて彼に幾分の親しみを持つ事が出来たのであつた。が、彼等も一瞬の後には、又以前の沈黙に——敵意を藏した沈黙に還らなければならぬ事が出来た。と云ふのは河に落ちた彼が、濡れ鼠のやうになつた儘、向うの汀へ這ひ上つたと思ふと、執念深くも一度その幅の廣い流れの上を飛び越えようとしたからであつた。いや、飛び越えようとしたばかりではない。彼は足を縮めながら、明礬色の水の上へ踊り上つたと思ふ内に、難なく其處を飛び越えた。さうしてこちらの水際へ、雲のやうな砂煙を舞ひ上げながらどさりと大きな尻餅をついた。それは彼等の笑を買ふべく、餘りに壯嚴すぎる滑稽であつた。勿論彼等の間からは、喝采も歡呼も起らなかつた。彼は手足の砂を拂ふと、やつとづぶ濡れになつた體を起して、仲間の若者たちの方を眺めやつた。が、彼等はもうその時には、流れを飛び越えるのにも飽きたと見えて、又何か新しい力競べを試むべく、面白さうに笑ひ興じながら、河上の方へ急ぐ所であつた。それでもまだ容貌の醜い若者は、快活な心もちを失はなかつた。と云ふよりも失ふ筈がなかつた。何故と云へば彼等の不快は未だ彼には通じなかつた。

彼はかう云ふ點になると、實際何處までも御目出度く出來上つた人間の一人であつた。しかし又その御目出度さがあらゆる強者に特有な烙印である事も事實であつた。だから仲間の若者たちが河上の方へ行くのを見ると、彼はまだ滴を垂らした儘、麗らかな春の日に目かげをして、のそのそ砂の上を歩き出した。

その間に外の若者たちは、河原に散在する巖石を持上げ合ふ遊戯を始めてゐた。岩は牛程の大きさのも、羊程の小さくのもの、いろいろ陽炎の中に轉がつてゐた。彼等はいんな腕まくりをして、なる可く大きい岩を抱き起さうとした。が、手ごろな巖石の外は、中でも臂力の逞い五六人の若者たちでないと、容易に砂から離れなかつた。そこでこの力競べは、自然と彼等五六人の獨占する遊戯に變つてしまつた。彼等は何れも大きな岩を輕々と擡げたり投げたりした。殊に赤と白と三角模様の倭衣の袖をまくり上げた、顔中鬚に埋まつてゐる、背の低い猪首の若者は、誰も持ち上げない巖石を自由に動かして見せた。周圍に佇んだ若者たちは、彼の非凡な力業に賞賛の聲を惜まなかつた。彼も亦その賞賛の聲に報ゆべく、次第に大きな巖石に力を試みようとするらしかつた。

あの容貌の醜い若者は、丁度この五六人の力競の眞最中へ來合せたのであつた。

三

あの容貌の醜い若者は、兩腕を胸に組んだ儘、暫くは力自慢の五六人が勝負を争ふのを眺めてゐた。

が、やがて技癢に堪へ兼ねたのか、自分も水だらけな袖をまくると、幅の廣い肩を聳かせて、まるで洞穴を出る熊のやうに、のそのそとその連中の中へはいって行つた。さうしてまだ誰も持ち上げない巖石の一つを抱くが早い、何の苦もなくその岩を肩の上までさし上げて見せた。

しかし大勢の若者たちは、依然として彼には冷淡であつた。唯、その中でもさつきから賞讃の聲を浴びてゐた、背の低い猪首の若者だけは、容易ならぬ競争者が現れた事を知つたと見えて、さすがに妬ましさうな流し眼をぢろぢろ彼の方へ注いでゐた。その内に彼は擔いだ岩を肩の上で一揺り揺つてから、人のゐない向ふの砂の上へ勢よくどうと投げ落した。するとあの猪首の若者は丁度餌に饑ゑた虎のやうに、猛然と身を躍らせながら、その巖石へ飛びかかつたと思ふと、咄嗟の間に抱へ上げて、彼にも劣らず樂々と肩よりも高くかざして見せた。

それはこの二人の腕力が、外の力自慢の連中よりも數段上にあると云ふ事を雄辯に語つてゐる證據であつた。そこで今まで臆面も無く力競べをしてゐた若者たちは、いづれも興のさめた顔を見合せながら、周圍に佇んでゐる見物仲間へ嫌でも加はらずにはゐられなかつた。その代り又後に殘つた二人は、本來さほど敵意のある間柄でもなかつたが、騎虎の勢で已むを得ず、どちらか一方が降参するまで雌雄を争はずにはゐられなくなつた。この形勢を見た多勢の若者たちは、あの猪首の若者がさし上げた岩を投ると同時に、これまでよりは一層熱心にどつとどよみを作りながら、今度はづぶ濡れになつた彼の方へ何時になく一齊に眼を注いだ。が、彼等が唯勝負にのみ興味を持つてゐると云ふ事は、——彼自身に對し

てはやはり好意を持つてゐないと云ふ事は、彼等の意地悪るさうな眼の中にも、明かによめる事實であつた。

それでも彼は相不變悠々と手に唾など吐きながら、さつきのより更に一嵩大きい巖石の側へ歩み寄つた。それから兩手に岩を抑へて、暫く呼吸を計つてゐたが、忽ちうんと力を入れると、一氣に腹まで抱へ上げた。最後にその手をさし換へてから、見る／＼内に又肩まで物も見事に擔いで見せた。が、今度は投げ出さずに、眼で猪首の若者を招くと、人の好ささうな微笑を浮べながら、

「さあ、受取るのだ」と聲をかけた。

猪首の若者は數歩を隔てゝ、時々髭を噛みながら、嘲るやうに彼を眺めてゐたが、

「よし」と一言答へると、つかつかと彼の側へ進み寄つて、すぐにその巖石を小山のやうな肩へ抱き取つた。さうして二三歩歩いてから、一度眼の上までさし上げて置いて、力の限り向ふへ抛り投げた。

岩は凄じい地響きをさせながら、見物の若者たちの近くへ落ちて、銀粉のやうな砂煙を揚げた。

大勢の若者たちは又以前のやうにどよめき立つた。が、その聲がまだ消えない内に、もうあの猪首の若者は、更に勝敗を争ふべく、前にも増して大きい岩を水際の砂から抱き起してゐた。

四

二人はかう云ふ力競べを何回となく闘はせた。その内に追ひ／＼二人とも、疲勞の氣色を現して來た。

彼等の顔や手足には、玉のやうな汗が滴つてゐた。のみならず彼等の着てゐる倭衣は、模様の赤黒も見えない程、一面に砂にまみれてゐた。それでも彼等は息を切らせながら、必死に巖石を擡げ合つて、最後の勝敗が決するまでは容易に止めさうな容子もなかつた。

彼等を取り巻いた若者たちの興味は、二人の疲勞が加はるのにつれて、益々強くなるらしかつた。この點ではこの若者たちも鬪鶏や鬪犬の見物同様、殘忍でもあれば冷酷でもあつた。彼等はもう猪首の若者に特別な好意を持たなかつた。それには既に勝負の興味が、餘りに強く彼等の心を興奮の網に捉へてゐた。だから彼等は二人の力者に、代る代る聲援を與へた。古來その爲に無數の鶏、無數の犬、無數の人間が徒らに尊い血を流した、——宿命的にあらゆる物を狂氣にさせる聲援を與へた。

勿論この聲援は二人の若者にも作用した。彼等は互の血走つた眼の中に、恐るべき憎惡を感じ合つた。殊に背の低い猪首の若者は、露骨にその憎惡を示して憚らなかつた。彼の投げ捨てる巖石は、屢々偶然とは解釋し難い程、あの容貌の醜い若者の足もとに近く轉げ落ちた。が、彼はさう云ふ危険に全然無頓着であるらしかつた。或は無頓着に見える位、刻々近づいて來る勝敗に心を奪はれてゐるのかも知れなかつた。

彼は今も相手の投げた巖石を危く躲しなから、とうとうしまひには勇を鼓して、これも水際に横はつてゐる牛程の岩を引き起しにかかつた。岩は斜に流れを裂いて、涼々とたぎる春の水に千年の苔を洗はせてゐた。この大岩を擡げる事は、高天原第一の強力と云はれた手力雄命でさへ、たやすく出來ようとは